

## ジェイムズ・ジョイス 『フィネガンズ・ウェイク』 第1部第1章の概要 (3.1 ~ 29.36)

著者	大島 由紀夫
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	14
ページ	105-122
発行年	2018-02-28
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1342/00001505/">http://id.nii.ac.jp/1342/00001505/</a>

[資料]

## ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』 第1部第1章の概要 (3.1 ~29.36)

大島 由紀夫\*

(Accepted November 14, 2017)

### The Epitome of James Joyce's *Finnegans Wake* I, 1

Yukio OSHIMA

**Abstract :** I translated into Japanese James Joyce's *Finnegans Wake* I.1 (3.1~29.36). In some parts I translated it word for word, but in other parts I just gave the gist of the sentences or the paragraphs. So in naming the title I used the word 'epitome,' not 'translation.' This chapter, as an introduction of the novel, suggestively presents motifs which hereafter develop into main themes. It includes strife in society or a family, the protagonist HCE's position parallel to legendary Tim Finnegan, HCE and his family members' personality and character, a troublesome accident which HCE meets in his life, and so on.

**Key words :** *Finnegans Wake* Part I.1 epitome

川は流れる。アダムとイブ教会を過ぎ、岸の曲線部から湾の湾曲部へと。そして私たちは、ヴィーコの円環状態になっている広い幅のその流れに乗って、ホースの城とその周囲に戻るのだ。

神聖なる愛の冒瀆者であり、再度半島で戦いを始めようとしていたサー・トリストラムが、ノース・アルモリカを出発したものの、こちら側、ヨーロッパの小国アイルランドのやせこけた地峡へ未だ到着することなく、波立ち騒ぐアイルランド海上にあった頃のことであった。そしてまた、オコーニ川周辺地層の上層部にある岩石が、その数をずっと倍にし続けていたものの、ジョージア州ローレンス郡までは堆積せず、ダブリンを作り出すこともない頃であり、また、自らの存在を知らせる遠くからの【神の】声が未だ轟かず、聖パトリックに洗礼を施すこともない頃であり、また、この後すぐのことだが、悪童が目が見えない老イサクに獣皮を未だ渡していない頃であり、また、すべて無駄な結果に終わるのだが、すねた姉妹が1人で2人を相手にしたジョナサン【・スウィフト】のことを未だ怒ってはいない頃であり、法王に捧げるビールを未だシエムもションもアークライトの光の下で醸造することのない頃であり、さわやかな虹がその末端まで水面に

未だその輪状の姿を見せてはいない、そうした頃のことであった。

かつて真逆さまに落ちた老いた先祖の、この落下（バババダガラグタカッミナッロンコンブロントナーロンツオンストロヴァッロウヌントーホーホールデネンスルナック！）の話は、初めはベッドで語られ、後の生活では、すべてのクリスティーマンストレルを通して伝えられた。壁の大崩壊は直ちに、壮健なるアイルランド人フィネガンの落下を伴った。いきなりのことだった故、丘に落ちたハンプティエーとしての彼の頭は、即座にダンプティエーとしてのつま先を求め、探索者を西に向かわせた。つま先がひっくり返っている場所とは、ダブリンが初めてリフィーを愛して以来、オレンジが緑の芝生の上で憩いを得ている公園にある小丘である。

（4）ここでは、意志とそれを否定する意志との間に、何というぶつかり合いが繰り返されたことだろう。牡蠣の王と魚の王とのぶつかり合い！ ブラケック、ケッケク、ケッケク、ケッケク！ コアックス、コアックス、コアックス！【マシンガンや砲弾の射撃の音】ウアール、ウアール、ウアール！クアオウアウ！【嘆きの声】ここではパルチザンの一員ボドレルが、掃討の名人マルカス・ミクグレイ

\* Professor Emeritus of Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT), 2-1-6 Etchujima, Koto-ku, Tokyo 135-8533, Japan (東京海洋大学名誉教授)

ンと対峙していた。ヴァーノン一族【18、19世紀のイギリスの提督】は、ホース岬にいる白衣党員【18世紀アイルランドの農地改革を主張した秘密結社員】から、食人種的气质を追い出そうとしていた。投げ槍とブーメランの嵐。神が流す血！ 我が恐れるところとなれ！ 血を流すことを栄光とする者を救いたまえ！ 武器の音がけたたましく鳴り響き、周囲を驚かす。殺せ、殺せ、殺せ。吊いの鐘だ、吊いの鐘だ。いかなる機会に寄り添われ、いかなる城が外気にさらされ、風穴をあけられたのか！ 命乞いをするいかなる言葉が、大目に見てやるいかなる言葉に誘惑されるのか。しゃっくりまがいの藁のようにか細い声で表す、彼らの後継者に対する真の感情はいかなるものであったろうか！ アア、ここに、この場所に、私通を犯した父親が埃とともに大の字になって横たわっている。しかし（オオ、我が輝く星よ、天体よ！）、至高の天に、落ち着きのある空中広告が何ときれいに紡ぎ出されていることか！ しかし、あれは何だ！ イゾルデだ！ 確かだろうか！ 老いた樫の木は今安らかに横たわっているが、榎の木は寝ているように言われたところで飛び回っている。落下する意志しか持ち合わせていなくとも、上昇しなくてはならない。そしてどちらであれ、当座はちょうどいい頃合いに、この喜劇は定められた世俗的な終局へと向かうであろう。

吃音者である専門家、建築の巨匠、自由人のレンガ職人であるこの人物は、ヨシュア的な土師たちが我々に民数記を与える前に、エルヴェシウスが申命記に関わるよりも前に（あるイースターの日に、彼は自分の未来の運命を知ろうと、樽の中に頭を重々しく突っ込んだ。しかし再び素早く出す前に、モーゼの力によって、まさにその水はすっからかんになってしまい、ギネスはすべて出エジプトの最終局面に達してしまったのだ。このことは彼がどんなにモーゼ五書的諸要素が希薄化している人間であるかを示しているはずである！）、家屋敷の中の、2つの裏部屋のうちのろうそくが灯された方の部屋で、想像出来ないくらいに豪放磊落な生活を送っていた。そして偉大なる驚異の年に、飲み助の村にいた、レンガ箱とセメントと建物に関わるこの男は、某河川の近くに住む生活者のために、土手の上に建物を次々に建てていった。彼には可愛い妻アニーがいて、彼はこの女を可愛がり、抱きしめた。髪の毛を手を持って、体のあの部分を持ち上げ、彼女の中に入れようとする。たびたび彼は吃りながら、司教冠を頭に乘せ、良質のコテを握り、彼が常に好んでいた象牙色のオーバーオールを着、ハルン・キルデリック・エグバートのように、乗法を使って建物の高さや数を計算し、ついには、双子が生まれた原因であ

る酒による啓示で、覆いのない、石造りの、直立して立つべき（喜びを与えたまえ）、古からの彼の頭の丸い尖塔が、ウールワースの高層ビルのような、恐ろしく比類のないくらいに高い高層建築物が、（5）ほとんど無の状態から屹立し、天まで届き、高く階層をなし、そのバベルの塔の下で焼け付く茂みを揺らめかせ、盗賊がよじ上っても転げ落ちてバケツをひっくり返す、そういう光景を目にしたのであった。

彼は紋章と家名を最初に得た人物であった。その家名はリーゼンゲバー【グリーゼンゲビルゲはズデーテン山地のこと】のワシリー・ブスラエフ【15世紀ロシアのパラードの英雄】という。地位を表す彼の紋章には、緑色の地に、見る者をまごつかせるような侍女が銀色に描かれ、また副伝令である、恐ろしげな角を生やした雄山羊が描かれていた。紋章の中帯には盾があり、そこには弓を引いている射手と太陽が、紋章学における第2の色合い、すなわち銀色で描かれていた。密造酒は鍬を扱う農夫のためにある。ホーホーホーホー、フィン氏よ、あなたはこれからフィネガン氏になる！ 月曜の朝は、オオ、あなたは葡萄酒だが、日曜の午後には、アア、酢になる！ ハハハハ、フィン氏よ、あなたにはまた終局がもたらされる。

実際何があの雷の日の悲劇、この都市で起きた罪深い出来事をもたらしたのか。我々の立方体の家は、アラファト丘【アラビア半島のメッカ近くの丘】で起きた雷【のような衝撃的出来事】の目撃者として未だ揺れている。しかし我々はまた、天からこれまで投げられてきた白い石をも汚すであろう、彼に向けられた銃口からの弾丸や勢いの衰えることのない投石となった、一まとまりの口汚い言葉を、これまで長きにわたって聞き続けてきたのだ。それ故我々を支える者よ、我々が正義を求める時、我々のそばにいたまえ。我々が起きる時も、楊枝を手にとって使う時も、革のベッドに横たわる時も、夜も、星が消え行く時も！ というのも、そばにいる隣人に会釈をすることの方が、その場にいない聖人に目配せを送ることよりもためになるからだ。さもないとあの主席司教のような囁き手が、アラビアの山とエジプトの海との間で、嘲りの声を上げる。草を切るかどうかは、シダを踏む奴に決めさせよ【急いで物事を頼む場合は、完全な専門家ではなくとも、少しでもその道のことを知っている近くの者に頼め】。そうすれば【噂話が飛び交う】その祝祭の日が、聖金曜日となることを我々は知ることになろう。彼女は予知能力を持っており、時々ヒトコブラクダであり陰鬱な夢を見ている、援助の要請者の求めに応えることがある。気をつけろ！ 気をつけろ。実際は

一部の者が言うように、レンガが誤って焼かれたのかもしれないし、また別の一部の者が言うように、裏の敷地が崩落したのかもしれない。(結局、同じことで1001件の話が今までに広まっている)。しかしアダムとイブの聖なる赤いリングが(彼が落下した原因である戦慄の元は、ロールス・ロイスであり、カージャックであり、驚くようなエンジン音であり、箱形のタービンの羽の音であり、市街電車の交通網であり、ひどく酔った咆哮者であり、自動車であり、小馬であり、隊列を作って通りを走る車であり、方向転換する乗り合い馬車であり、メガホンであり、祭りの騒ぎであり、あの寄り合いの声であり、バズルカ砲であり、天まで届く犬の鳴き声であり、万引きであり、楽しそうなつぶやき声であり、制服の警官であり、警官から金を借りるメックレンバーグ【売春街】の借金まみれの娼婦たちであり、マールバラ・バラックス【ダブリンの1地区】であり、古めかしい前方のフォー・コート【裁判所】であり、主要街道であり、(6)彼の使う明るい黒の1ダース12ペンスの杖であり、安全第1通りを滑走する乗り合い馬車であり、曰く付きでない街角をこっそり曲がっている飛行船であり、彼の町のその土地に住む、家に閉じこもっている人物、家を掃除している人物、塔のあるドームの風変わりな壁を這うように登る人物、これらの人物たちの煙草の煙、高尚さ、物音であり、わめくようなすべての呼び声、少女を求める声、ハイカラな橋の下で大樽を求める声である)、泥酔してよろめくフィルに1回警告を与えたのは、きわめて確かなことだった。頭が重く感じられた。彼の頭はまさに揺れていた。(もちろん屹立した壁があった)ディン！ 彼ははしごからよろめいた。ダン！ 彼は死んだ。ドン！ 墳墓へ、墳墓の中へ！ この時、彼のリュートの音が樂しげに長いこと鳴り響いた。全世界が【彼の死を】知るよにと。

墓だって？ 私は理由を知らなければならぬ！ マクールよ、マクールよ、いったい何故あなたは死んでしまったのか。辛い木曜日の朝に。フィネガンのクリスマスの通夜に、彼ら全国のならず者たちは、驚愕の中でひれ伏しつつ、嗚咽し嘆息した。そして見るに耐えないほどに、はばかりことなく狂ったように泣き叫んだ。配管工も馬丁も州長官もシターン【ギターに似た古楽器】引きも騎手も映画人も。そして皆陽気に大声を出しながら輪に加わった。興奮してしゃべりあった。彼らの周りにはグログ酒があった。この宴が続く限り、皆が酔いつぶれるまで！ ただ単に声を合わせて歌うだけの者たちもいるが、多くの者はたたた立って哀歌を歌っている。大声で彼を持ち上げる者もいるが、大声で彼を

罵倒する者もいる。彼の体は硬直しているが、堂々としている。ブライアン・オリン【アイルランドのバラードの主人公】だね！ 彼こそがたしなみのある、陽気に働く若者だった。彼の円錐形の墓を尖らせよ、ビールをついで出してやれ。世界中のどこにおいても、このような騒音【噂話】をまた聞くのだろうか。彼らは首を回らなくする崖縁の所持金と薄汚い忠誠心をもってしゃべっている。彼らは彼を夜明けに立派な最後のベッドに乗せた。ウイスキーが1瓶足下に置いてある。ギネスが1樽枕元に置いてある。この流体を飲めなくなることが、この泥酔者についての駄弁の上にかかっている。アア！

頑張れ、今見ている老いた回転する天体【フィネガン】に代わるものは、若い土壌【HCE】しかない。この2つは反復する点で同じものだ。彼の体軀は今や魚のカレイみたいに平たく、大きくなりすぎた訳の分からぬ言葉を話す【寝転んだ】乳児のようだ。そういう訳で【モレが著した『エジプトの王と神』の】88ページに書いてあるような大皿となっている彼の姿を見てみよう。フムフム！ 彼はチャペリゾッドから【ホース岬の】ベイリー灯台まで、あるいはアシユタウンからホースの突先まで、あるいは土手の近くから岬の周りまで、あるいは丘の麓からアイルランズ・アイ【ホース岬の近くの小島】まで、静かに体を伸ばしている。そしてずっと(角笛だ!)湾に吹くオーボエのような風の音が、(7)フィヨルドから丘へとわたり、岩に囲まれた彼を嘆き悲しませ(よせ、やめろ、ドウドウ)、その身を揺さぶるであろう！ そして生涯にわたって、真偽がまだら模様の密告がなされる夜、陰鬱な教会の鐘の鳴る夜、きわめて巧妙に強弱を使い分ける彼女の軽やかなフルートの音が(オカリナだ！ オカリナの音だ!)、彼を目覚めさせる。ヴァネッサや、ピーター、ジャック、マーチンが彼ら皆の話を一部始終話している中で。墓の話を語っている中で。愛すべききたないダブリンの話を語っている中で。暴食の前に感謝の祈りを捧げて。我々が実際そうするかは大きな疑問だが、ともかく我々が信じようとしていることのために。それ故、その吊いの鐘を鳴らせ、そして胃袋のために魚を渡せ。アーメン。そうその通り。祖先たるこの男は落下したが、祖先たるこの妻は料理を広げた。料理のポイントは何か。フン、フン、フン、【「フン、フン、フン、英国人の血の匂いがする」は、『リア王』中のエドガーの台詞】魚料理だ。彼の食べる焼いたパンは何か。聖パトリック・ベーカリーで焼いたケネディーズ・ブレッド1個だ。彼についての話の中でホップと結びつくものは何か。ダニエル・オコンネルのところで醸造された有名な昔からあるダブリンのビールだ。しかし

いか、君が彼の飲む偽りのビールをがぶ飲みし、花のように白いパンの中央部に歯を立てるような時には、彼をベヘモット【聖書中の巨獣】として見よ。というのも彼はどこにもいないからだ。終わったのだ！ 昨日の場面の写真しかない。赤みがかっているシャケであり、アガペーの時代から出てきた古代人たる彼は、霧に溶け、悲嘆にくれながら遠くに去ってしまった。それ故、切り刻まれ、厄介払いにされ、姿を消したその男のためのその食事は用無しになったのだ。

しかし我々は巨大魚類の姿を、夜時になってもまだ見ていないだろうか。この巨大生物が愛し寄りかかった、マスの幼魚のいる川に生えたスゲの木のそばで眠っているこの巨大魚類を。ここに小柄の自由な女性と連れ立った支配者が眠っている。もし彼女がエプロン姿だったり、使い古した服をまもっていたり、もっと悪臭漂うぼろをまもっていたり、あるいは晴れ着を着て金をたんまりともち、貴金属類を貧乏人の持つものとするほどであったならばどうなのであろうか。オヤ、確かに我々は皆小柄のアン・ルイニー、いや、こう言うつもりだったのだが、アンナ・レイニーを愛している。傘をさしつつ、水溜まりの中を、山羊のように踊るように進んでいく彼女を。ヨー！ 巨大生物さんは寝ているよ。ヨー、いびきをかいて。ホースで、そしてチャペリゾッドでも。彼の理性の容器である彼の頭蓋は、反対側の遠くの霧の中を覗いている。ホースにおいてか。彼の土まみれの足は緑の草に覆われ、最後に落下したところから、マガジン要塞のある丘のそばでむき出しに突き出ている。その丘では、我々のマギーがショールを羽織った彼女の妹とともに、すべてを見つめている。一方苦しみの丘シックスティー・ヒルの背後で成立したこの良き同盟関係【ウェリントンとプロイセンの陸軍元帥ブリュヒャーとの同盟】と敵対して！、砦の後ろに砲兵、タラの砲兵、タラの砲兵がおり、また伏兵が潜んでいる。その場所で彼らは、伏せろとか立ち上がれ、者ども、奴らをカタワにしろ、といった命令を待って待機している。それ故、雲が過ぎ行くと、ジェニーよ【「雲が過ぎ行くと、ジェニーよ」は歌のもじり】、誇り高い目に(8)山のような建物が入り、楽しい気分になれる。ウェリントン国立博物館だ。緑に覆われた遠くに、湿地帯と2人のきわめて色白の村の娘が見える。彼女たちはこの場所の葉の間で、クスクス笑っている姿をちらつかせている。可愛い女の子たちだ！ 通りがかりの者は、自由に小丘にあるこの博物館に入ることが許される。公園の中に入ったウェールズ人もアイルランド人も1シリングで！ 身体障害者となった老いた衛兵の病人には、押ししてもらって見て回

れる、彼らの臀部を満足させる車椅子がある。合鍵を渡されているのは、女係員ケイト女史である。チップをお願いします。

この通路を進むと、博物館の展示場です。帽子を脱いで中に入りましょう！ さて、今ウェリントンの展示室にいます。こちらはプロシアの銃です。こちらはフランスの銃です。チップをお願いします。こちらはプロシアの旗です。雷管と回転台もあります。こちらはプロシアの旗目がけて撃たれた弾丸です。こちらはイギリス人目がけて発射され、プロシアの旗に当たったフランスの弾丸です。戦場を横切る弾丸に敬礼！ 槍と股鉞をもって立ち上がれ！ チップをお願いします。(イギリスの歩兵です！素晴らしい！) こちらはナポレオンの三角形の帽子です。チップをお願いします。ナポレオン帽です。こちらは同じく白馬であるコペンハーゲンに乗ったウェリントンです。こちらは堂々として魅力的な偉大なる虐殺者ウェリントンです。金色の拍車と香料の入ったズボン、4分の1が真鍮で出来ている木靴、偉人としての靴下留め、バンコック製のベスト、詩人としてのオーバーシューズ、ウエストがゴムの着やすい軍事用のズボンを身に着けています。こちらは彼の大きな白馬です。チップをお願いします。こちらは3人のナポレオン軍の少年兵で、悲惨な状態でしゃがみ込んでいます。こちらは敵兵を殺そうとしているイギリス兵です、こちらはスコットランド龍騎兵連隊です、こちらのかがんでいるのはウェールズ兵です。こちらはナポレオン軍の大きな兵隊がナポレオン軍の小さな兵隊を殺害しているところ。騒がしい議論を行っています。こちらは大きくも小さくもない可愛いナポレオン軍の少年兵です。ちょっと、いいですか！ 穴触りのフィッツ・トーマス君です。汚れ者マック・ダイク君です。毛むくじやらのオハリー君です。彼らは皆アルメニアのわんぱくたちです。こちらはジュリアアルプスです。こちらはラッカ山です、こちらはホロヨイ山です、こちらは壮麗なエンジン山です。こちらが3人のナポレオン兵をシェルショックから守ろうとしているアルプスのクリミア稜線です。こちらは麦藁帽子をかぶった女兵士で、戦術についてのハンドブックを読む振りをしています。彼女たちが戦いに加わることによって、ウェリントンは決意を鈍らせています。彼女たちは自分たちの手にささやきかけ、また髪について語っています。そしてウェリントンを見てこの1隊は燃え立っています。女兵士たちの右側面にあるこちらは、サイズの大きな、ウェリントンの形見の望遠鏡です。驚異の傑作です。性能の良いエクスカリバー的存在です。チップをお願いします。(9) こちらは最も嫌悪感を与える、最も不

快に日焼けしているクロムウェルの邸宅から、雌の子馬をこっそり持ち出しているベルギー人です。戦利品です。こちらはウェリントンにいらだたせるために、この女兵士が急いで生理的处理【排尿】を行なっているところです。薄い赤の線状となった処理したものがベルギー人のシャツの前部を横切っています。貴兄、あなた、君！ 親愛なるアーサーよ、恐怖で病気になっているのではないか！ 君の可愛い奥さんはどうしているのか。敬具。ナポレオン。これはウェリントンを困惑させるための女兵士の戦術でした。ごらんなさい、ソウ、彼女たちは！ 女兵士は嫉妬深く、すべてのナポレオン軍の兵士たちにも言い寄ったのでした。でもナポレオンの兵隊は、たった1人ウェリントンだけに女兵士が夢中になったために袖にされたのでした。そしてウェリントンはこの1隊を燃え立たせています。こちらは伝令のベルギー人です。縁なしの毛皮帽をかぶっています。耳に玉状の耳栓を入れていて、ウェリントンに対する聖なる約束の言葉を発しています。こちらはウェリントンが投げ返した伝令です。このベルギー人がほとんど行ったことのない地域に派遣された伝令です。サラマンカ【ウェリントンがナポレオンを破った地】なのです！ ソウ、ソウ、その通りなのです！ 親愛なる雌ロバ諸君、くそつたれ！ たいしたことはないよ、敬具、ウェリントン。これは最初のウェリントンのジョークでした、仕返しだったのです！ 彼は、この人は、この方は！ こちらはベルギー人です。12マイルに及ぶ道のりをゴム靴を履いて進んでいます。湿った、高い音が鳴る、何よりも土を踏みしめて前に進むこのゴム靴を履いて、キャンプ地を離れ、雌ロバの元へと向かうのです。1口すすれ、1口すすれ、というのも、彼は古くさい貯蔵してあるスタウトを買うよりも、むしろギネスを一杯買う方が好きだからです。こちらはロシア製の弾丸です。こちらは塹壕です。こちらはライフル射撃隊です。こちらはオレンジがかった赤色の鼻をした砲弾の餌食たち【兵士のこと】です。彼ナポレオンが受けた100日間の免罪【ナポレオンがエルバ島から脱出しウェリントンと戦うまで100日あった】後のことです。こちらは負傷兵です。タラ【ダブリンのこと】にいる未亡人です！ こちらは美しい白いブルーチャー【靴の1種】をはいた女兵士です。こちらは赤い靴下をはいたナポレオン軍の兵士です。こちらはウェリントンで、ヨーク的分隊の近くにいます。射撃を命令しています。砲弾を鳴り響かせよ！（命中！ 発射！）こちらは騎兵隊です。こちらは投光照明機です。こちらは任務遂行中の潜水艦です。こちらは彼らの混乱状態です。こちらは大変なパニックに陥っているところです。全能の神

よ！ アーサー【ウェリントンのこと】は敗れるはずだ！ 次のようにウェリントンは叫んでいます。轟かせよ！ 重く鳴り響かせよ！ 大砲を撃て！ こちらは女兵士が叫んでいるところです。嵐だわ！ 神よ、イギリスを罰したまえ【第1次世界大戦中ドイツ軍が用いていたスローガン】！ こちらは潜伏先の丘から、占有侵奪者の元に逃げ帰ろうとしている女兵士です。寒風の中すばしこく、快活に非常に軽やかに。というのも彼女たちの心はまさにこの場所にあるからです。チップをお願いします。こちらは、彼の冷所となった小箱に入っているクレーブを乗せておくための、ベルギー人が感謝感激して自分の所有とした皿です。報酬は惨めなものでした！ こちらは女兵士たちマーサとメアリーが後に残した、そのクレーブを噛んだ痕跡です。こちらは王者としての気晴らしに、ウェリントンが逃げ行く女兵士どもを、同じく形見とした「自助」という名の望遠鏡を振り回すようにして使いながら見ているところです。豚の足のような望遠鏡です！ 過ちから我々を救いたまえ！ こちらはナポレオン軍の中で最も可愛い者です。(10)彼の太柄の馬コペンハーゲンから降り立ったウェリントンを監視しているあのスパイ、トフィースィーフです。頑強なウェリントンは、夫婦関係が昔からの戦場です。ナポレオンは好男子の独身者です。こちらは残酷なるヒネシー【元来アイルランドのコニャック名。ここではナポレオンのこと】で、ウェリントンを声に出してあざ笑っています。こちらは病持ちのドーリーで、ヒネシーの体臭と戦っています。少年のドーリーとヒネシーの間にいるこちらは、ヒンズー教徒のシマー・シンです。こちらは怒った老ウェリントンが、戦場でナポレオンの三角帽を拾い上げているところです。これはヒンズー教徒が爆弾に対して怒り狂っているところです。これはウェリントンがナポレオンの帽子の半分を、彼の太柄の白馬の尻尾にぶら下げようとしているところです。チップをお願いします。それはウェリントンの最後のジョークです。フン、フン、フン、ぴったりだ！ これはウェリントンの同じ白馬コペンハーゲンが、ナポレオンの三角帽子を尻尾から垂らし揺らして、ヒンズー教徒の覗き見の少年兵を馬鹿にしようとしているところです。駄目だ、駄目だね、駄目だよ！（牛の糞め！ 汚らわしい奴！）こちらはその少年兵が烈火の如く怒り、飛び上がり、息を切らして、ウェリントンに叫んでいるところです。本当に！ お前は糞野郎だ！ こちらは生まれが賤である紳士のウェリントンです。毒突いているシマー・シンに最大限の駄目出しをしています。糞でも食らえ！ こちらは彼を殺そうとしている少年兵で、ウェリントンが乗っ

た大きな幅広の馬の尻尾の先にある、ナポレオンの帽子の半分全体を、火器で吹き飛ばそうとしています。どんな風にコペンハーゲンが命の終わりを迎えたのかは内々にお教え下さい（金的だ！ 獲物だ！）。博物館はこのような具合です。出口では履物を間違えないようお気をつけ下さい。

ピューー！

そこにいた時には何と暖かかったことか。それに比べてこの場所は、死ぬほどの寒さだ。彼女がどこに住んでいるか我々は知っているが、後生だからこのことは誰にも言わないようにしてくれ。ここは29の窓のある、ろうそくが灯された吹きさらしの家だ。丘に建っていた。小高い丘に。そして窓の数は29であった。そして全く季節にふさわしい天候であった！ 強い風がピルトダウン人の周りでワルツを踊っていた。そして吹きさらしの塚としてのすべての岩（もしあなたが50個見つけたならば、私は更にもう4個見つけ出す）の上で、つむじ曲がりの鳥が【様々なものを】拾い集めていた。彼女は、少しばかり走ったり、少しばかり行動したり、少しばかり味見したり、少しばかり注いだり、少しばかり拭いたり、少しばかり蹴飛ばしたり、少しばかり切断したり、少しばかり食べたり、少しばかり泣き言を言ったり、少しばかり知っていたり、少しばかり助けたり、少しばかり金銭欲をもったりするひねくれ者の鳥であった。ムクドリの住む野の台地において！ 彼の7つの荒れ狂う盾の下に、ならず者の皇帝が1人横たわっている。彼の剣は彼の脇にある。弾丸は彼の胸に収められている。つがいの鳩が北の崖の方へ飛んでいく。(11)3羽のカラスが突然南の方に向かって羽ばたき、天のそちらの方に、大災害が起ることを鳴いて伝える。するとそちらの方から3匹の雄牛がそれに答える。心配するな、大丈夫だ！と。トールが大雨を降らせる時、彼の水の妖精たちに対しトールの稲妻が光る時、トールのアイルランド民族に対し、トールの起こす風が吹き荒れる時、彼女は決して出てこない。絶対に！ どんなことがあっても！ 彼女はあまりに怖がるであろう。自分の足を埋める者を、自分のギョロツとした目をつぶす者を、この世界のあらゆる死者を。フン、フン、フン！ 過去が過去になるまでひたすら希望を持ち続けるだけであろう。ここに、そして今、彼女が出現するように見える。平和の鳥が、極楽鳥が、名付け親となるペリが、陽気な島の意地悪女が、おちびさんとともに、背にバッグを乗せたまじない師が、平穏の中の幸運の虹をいたずらっぽく投げかける、チョコチョコ動き回る火薬のつまったそばかすの女が、あちらこちらでとんな子猫チャンを拾い上げてはくちばしでついでついでこの女が。しかし今夜

は休戦中であり、戦争中の平穏の時なのだ。軍需関係の労働者にとっても、明日が楽しいクリスマスであることを我々は願う。至るところで、最も幸せな子供たちにとっての豪華な停戦となろう。私の近くに來たれ、そして我々の祝うこの日、ともに歌を歌おう。彼女は御者のヘッドライトを借りた。見るのに必要だからということで余計うまく借りられた（彼女はキュートだ、彼女はしっかりしている、彼女はあちこち素早く歩き回る）。そしてあらゆるがらくたとなったものが彼女のナップザックの中にしまわれた。ケース類、ガラガラ音を立てるボタン、毛羽立ったゲートル、すべての国の国旗、骨類、地図、鍵、2ペンス銅貨の薪の山、赤い点がMの文字形に付いた月光色のブローチ、ボストンの靴下留め、大量の靴、小間物、何にでも使えるフォルダー、おいしそうなケーキの包み、ネエ、あなた、その後お元気？という手紙、大いに愛し合っている彼と彼女、鐘の泣き声、心の底から出る最後の嘆息（全くの嘘だ！）、太陽の下における最初の罪（それは正しい！）、キスとともに。キリストにキス。十字形に。十字架にキス。人生の最期まで。さようなら。

我々皆を、裕福な君主の後継者や未婚の淑女とするために、厳しく禁じられているにもかかわらず、のちに予言者となる過去の人物のところから歴史的な贈り物をこっそりもってくるとは、彼女は何と素晴らしくまた現実的なのだろうか。彼女は我々が受けている恩義のただ中に生きており、我々の賞賛の拍手の中で笑っている（彼女の喜び様は制御しがたいものだ）。もしもあなたが私に求めれば、また私があなたに命じるならば、彼女はマスク代わりにエプロンをかけ、木靴を蹴って鳴らし音楽を奏でるだろう（何と奇妙なことか！ 何と哀れなことか！）。ハウ、ハウ。ギリシャ人が繁栄し、トロイ人が衰退するのかもしれない（常にある事態には2つの側面があるのだ）。(12)というのも、きわめて先の見えない人生の脇道においては、このことが人生を送っていくことを価値あることとし、この世界を市民が座すべき1つの小部屋とするからだ。若い女をしてこの話を持ち帰らせよ。若い男をして戦闘員がいなくてここでこの話をよどみなく語らせよ。ロンドン中が寝静まっている間、彼女は夜の務めを果たすことを知っている。お前は何か貯めたのか、と彼は言う。私が何ですって、とニヤリとして彼女が言う。そして彼女が欲得ずくであるが故に、結婚している彼女が我々は皆好きなのだ。所有地は広範囲に債務返財の対象となっており（何ということだ！）、この悪党氏である巨匠の毛のない顔には、頭髪もなければ眉もないのだけれども、彼女はマッチを借りて、泥炭に火を興し、岸に行つてザルガイを探し熱を通す

など、家事を押し進めるために泥炭を扱う女が出来るあらゆることをやり遂げるであろう。頑張る。輝く火を興すために。パチパチと。もったいぶったあご髭を生やしたあらゆる忠言者が忠告する中、ハンブティーが再び前と同じように無様に何回も落下しようとも、彼のための朝食用の卵は、注意深く片面だけ焼いた目玉焼きとなってその朝出てくるであろう。実際世の中がひっくり返ろうとも、紅茶もまた必ず用意されるであろうし、また執事を見かけたと思っても、この執事が料理しなかったことは確かなことなのだ。

財産の維持という行動力を必要とする仕事に、彼女は最良の結果を实らせながら、自分の持ち分も手にしながら従事しているのだが、一方我々はその間に、他の場所にもあるようなここにあるこの塚はさておき、2つの小丘についてみていくのもよいであろう。この乱雑状態の小丘は、さらさらと音を立てるサテンの衣服やタフタのタイツを身に着け、あちらこちらにしゃがんでいる、尻の臭い、オマルの匂いがする、また、公園のグラウンドで3つに分かれてウォートンズ・フォー要塞ごっこをしている、数多くの少年少女のようなものだ。立ち上がれ、ミック隊よ！ ミンナ隊を攻撃せよ！ 命令だ、ニコラウス・プラウドよ、といった具合に。もしこれがコークヒルの足の短い市民や、アーバーヒルの荒野の市民や、サマーヒルの浮かれはしゃぐ市民や、ミゼリーヒルの監房生活の市民や、コンスティトゥーションヒルのその土地に支配された市民なら、あらゆる群衆にそれなりの気質がいくつもあるけれども、あらゆる商売にそれなりのうまい商売方法があるけれども、1つ1つの調和に独自の特徴があるけれども、オラフ道路は左に、アイヴァー通りは右に、サトリック・プレイスはその間にあるけれども、我々には何も見えないかもしれないし、何も聞かないかもしれない。しかしこうした少年少女たちは、そこにいる全員が、人生上の謎を解いて満足する可能性をひねり出そうと懸命になっている。金網の上の鮭のように人生の真ん中で飛び跳ねながら。アア、彼がホース岬の大きな町から、火薬の基【フェニックス公園のマガジン要塞】という小さなところまで体を伸ばして眠っている時に。この場所はアイルランド的意味合いを帯びるのにふさわしいところである。(13)それは本当かね？ ここでは英国的なものが見られるかもしれない。大いにか？ 教皇献金1ペニーに対する1ポンド金貨分にだ。堂々とか？ 沈黙がこの場所【マガジン要塞】を語っている。まやかしなのだ！と。

それではここはダブリン的なかね。

静かに！ 用心せよ！ ここは一言しゃべると

あちこちにこだまするところなのだ！

何と素晴らしく魅力溢れるところだろうか！ この場所は彼のむさ苦しい居酒屋の染みだらけの壁にかかっていた、我々がよくぼんやり見ていたあの色のあせた版画のことを思い出させる。昔彼らは？ (きっとあの、美味しそうなチョコレートの箱をもった、疲れた顔の礼拝堂の酔っぱらい、泥だらけのミッチェルが聞き耳を立てている) つまり、夢魔のいる支石墓がそこに埋められた、あの古ぼけた版画という廃品のことだ。昔我々は？ (彼はただ、もう1人の耳を傾けている疲労困憊の人物、燃えている男ファレリー【フィアドルカ・ファレリー、アイルランドの18世紀の詩人】からもらった記念祭用のハーブを一生懸命ひいている振りをしているだけである。) これはよく知られていることである。彼を捜し出し、そしてその昔からの丘を新たに見てみよ。ダブリンで。光を音に変える有名な聴光器で。聞こえるか。マガジン要塞のそばで。フィルムフィルム、フィルムフィルム。荘重な葬儀とともに。ファムファム、ファムファム。この音は現実を示す聴光器だ。聞け！ ホイートストーン【19世紀の英国の物理学者、楽器製造業者】が作った魔法の竖琴の音色を。彼らは精を尽くして奏するであろう。彼らは音楽すべてに耳を傾けるであろう。彼らは【感動のあまり】倒れるであろう。そのハーブシコードは常に彼らのものとなるであろう。

それ故我々のヘロドトスの如きママルージュは、ボレウム【ドネガル】近くで著したその偉大なる古き時代に遡る歴史書であり、町の年代記である最良の調査報告書の中で次のように記した。ディフリナルスキディ【バイキング支配当時のダブリン一帯】における4件の事柄は、ヒースの葉や、煙のような雲をもつアイルランドの島が衰え消え去るまで、消滅することは決してないであろう、と。この猫背男についての4件の事柄を今ここに載せる。それらは4角ごまの各面のように、似て異なるものである。1件目(アダール【ユダヤ暦の6月】)、年配の男の体の上に乗ったブン・ブルベン【スライゴーにある山、この場合には頭のこと】についての件。アア、何ということだ！ 2件目(ニサン【ユダヤ暦の7月】)、哀れな年老いた女が履いている靴についての件、エッ、ホー！ 3件目(タンムズ【ユダヤ暦の10月】)、捨てられた赤茶色の髪の乙女が、花嫁としての涙を流していることについての件、何と、ひどい話だ！ 4件目(マーエシュバン【ユダヤ暦の2月】)、剣と同じくらいの力を持たず、そのため究極的に手紙も書けないペンについての件。そして次に。これで全部。(スコス【ユダヤ教の仮廬の祭り、第7月【現代の9、10月にまたがる】15日から8日



間】)

それ故、アナクレトス2世派とイノセント2世派とが、教皇側、反教皇側の戦いを繰り広げている歴史書のページを、怠け者の放屁が次々にめくったように、行為を吐き出しているこれらの生者のその行いの1葉1葉が、彼らについての年代記が、国家の大きな出来事のサイクルに合わせ、化石がその時代の様相を物語るように、その時の様相を物語る。

紀元1132年 蟻のように人間たちが、川に横たわっている大きな白いクジラ【HCE】の上でうろうろしている。脂肪分を含んだ海藻の数がダブリンで上昇する。

紀元566年 洪水のあとのこの年のかがり火の夜に、1人の老婆が柳枝細工のかごをもち、(14)うろつきながら、わびしいかごの下を見、沼から泥炭を引き出そうとした。好奇心を満たそうとしたのである。しかし何とそこから見つけたものは袋に入った、黒ずんだ、足を蘇らせるすごく質のいい木靴と、小さな優美な汗にまみれたブローグであった。ダブリンで売っている汚れた製品だ。

(静寂)

紀元566年 この頃真鍮色の巻き毛の女の子が悲しんでいた(高まったり静まったりして!)。というのも、お気に入りのお人形さんが人食い鬼のプロピウス・パイアスに見初められてしまったからだ。ダブリンでの血に染まる戦争だ。

紀元1132年 家主と彼の醜女の妻との間に、1度に2人の息子が生まれた。これらの息子の名はキャディーとプリマスといった。プリマスは聖人となり、社会的地位をもった人々を教化した。キャディーは酒場に行き、1編の詩を書いた。ダブリンにとって染みで汚れた言葉を。

どうやら大洪水以前とキリスト紀元との間の、どこかギンヌンガガップのような空隙に、この年代記者はその巻物をもって逃げてしまったに違いない。大波の洪水が起ったのか、大鹿が彼を襲ったのか、天の高みからお出ましになられた世界の創造者兼支配者(要するに雷光)が申し渡したのか、あるいは冷酷なダニーマン【ブシコーの作品中の密告者】がいまいましくも扉を閉じて閉め出してしまったのか。ある年代記者を殺した者は、古い法典の下、犯罪が軽微だということで、人物が彫られた硬貨による6マルク9ペンスの罰金で直ぐに釈放された。その一方で、時代も後の方になると、時々しか起らないことだが、軍と市民との交戦の引き金になったからといって、隣人の金庫の引き出しからこっそりこの罰金と同額の金を盗んだために、女が断頭台に登らされたことがあった。

さて、遠くかけ離れた異世界の、怒りのこもった、

明確な内容を読んだ後、この大著である報告書から耳を離し、暗い目を上げてみると(見よ!)、薄闇の砂丘、黄昏の林間の空き地、平穏な平原が目の前に広がり、何と世界は平和であり、憩いに満ちていることか! カサマツの下にやせた司祭【パトリック?】が杖を置いて横たわっている。若い牡鹿がその牡鹿の妹とともに再び緑となった草原で草を食んでいる。その牡鹿が食んでいる揺れる草の間で、紫の花の葉が愛らしい。高い空はずっと曇っている。しかもこのような様子が何年も続いている。ヒーバー人とヘレモン人【想像上のアイルランド人の祖先】が争っていた時から、ヤグルマソウはボリマン【ダブリンの1地区】に生え残っていた。(15)マスクローズはゴーツタウン【ダブリンの1地区】の生け垣を選んで咲いていた。チューリップは薄明かりの小さな美しい町ラッシュ付近でひしめき合っていた。白や赤のサンザシが、ノックマルーン・ヒル【フェニックパークの西側】の5月の谷にかなり楽しげに咲いていた。それらの花の周りで、1000年間の近日点【地球が太陽に最も近づく位置】の期間に、フィモール人がデー人(ノルマン人の)の歯をぼろぼろにし、バイキングがフィアボルグ【伝説上の初期のアイルランドへの移住民】によって苦しめられ、巨人どもがケヴィンのために安普請の家を大急ぎで建て、リトル・グリーン・マーケットがこの都市にとって子供でありながら親となっていたけれども(聞け! 聞け! そして笑いの涙を!)、これらの平和のシールを貼ったボタンホール【ボタンにさす飾り花】は、何世紀にもわたってカドリールを踊って来た。そしてキラルー【ブライアン・ボルの宮殿のあるところ】での夕べの宴のように、新鮮で満面笑みを浮かべたその香りを我々に吹きかけてきた。

おしゃべりな人間たちはこれまで無駄な言葉を使ってきた(混乱が彼らを支配している!)。過去においてそうだったし、そうになっていった。金を要求するならず者たちがそうだったし、賛美歌を歌う者たちがそうだったし、見栄えのいいノルウェー人たちがそうだったし、頭の空っぽなフィアンセがそうだった。男どもは馴れ馴れしく話し、店員はひそひそ声で話し、ブロンドの髪の男はブルーネットの髪の女をくどいた。僕のことを愛しているかい、僕のカワイコちゃん。そして黒髪の女は金髪の男に言い返してきた。お馬鹿さん、あなたのプレゼントはどこにあるの? そして彼らはいがみ合い、ひれ伏し合ったのだ。昔から今日まで、夜な夜な野原のすべての大胆な植物どもは、内気な動物の恋人たちに、「私がお前の気になる前に私を摘んじゃって!」とだけ言う。そしてほんの少し時間が経った後、「私が顔を赤くしている間に私をむしり取って!」と言う。

実際彼らがしぼんだり、快活になったり、たいそう顔を赤らめたりするのももったもなことだ！ というのも、そういう話はホース岬と同じくらい昔からあるからだ。しばらくの間、クジラを手押し車の上に乗せ（私がお前に言った真実はそれではないか）、あんなふうにしミー【ダンスの1種】を踊っているかのようにヒレをばたつかせ揺らせたままにさせておけ。ティム・フィネガンはここで女を誘惑したのだ。ちょっかいを出すティムは。軽薄にも！ ヒレを使って！ 蚤の頭を使って！

飛び跳ねて！

アダムの権威をもちつつ、この田舎者は痛んだゴム草履をはき、1人小さな丘の小道にいる。彼は乞食であろうか。彼の頭はピグミーのような猪のような形となっており、大儀そうに歩く足は縮んでいる。つま先は岩のように固く、すねは短く、そして見よ、それは胸で、その筋肉は哺乳類動物の筋肉のようで、これ以上はないというほどに怪物のようである。この胸はある動物の頭蓋骨から喉を潤している。私にすれば、竜となった人間のようなものである。彼は1月であろうと2月であろうと、3月であろうと4月であろうと、荒れ狂う大雨の月であろうと凍える月であろうと、たいてい場合、この近くの地所の見張りをしている警官サッカーソンなのだ。(16)何ともものすごい様相なのだろう。熊のようだ。明らかにこの親父はずるけている。彼が防御に使用している火と、切れ目の入った髓骨の集まりとを越えて行こう。(洞穴だ！) 彼はおそらく「ヘラクレスの柱」【ジブラルタル海峡を挟んでそびえる2つの岩山】に至る海の道を行けと言うであろう。ネエ、君、金髪氏よ、今日はどんな風に過ごしているのかね。エッ、何だって、君！ 君はデンマーク語を話すのかい。いや。スカンジナビア語はどうかね。駄目だね。スペイン語訛りの英語は？ しゃべらない。サクソン語は？ いいや。すべてが明らかになった！ これはジュートだった。お互い帽子をとって挨拶を交換し合い、たまたまくそ難しい言葉が出てきたら、適当にいくつかの強変化動詞を弱変化動詞に【して、簡単に理解出来る言葉に】しよう。

ジュート — ヤア、君！

ミュート — ミュートだ。会えて嬉しいよ。

ジュート — 君は耳が聞こえないのか。

ミュート — 幾分ね。

ジュート — でも耳が聞こえなくて口も効けない、というのではないだろう？

ミュート — 違うよ。吃音が出るだけだ。

ジュート — 何だって。どうしたんだい。

ミュート — 僕はどどど食べるようになったんだよ。

ジュート — 何でこんなひひひひひひどいことになったんだ！ どうしてなんだい、ミュート。

ミュート — ボトルのせいだね、愚かなことさ。

ジュート — どの店のたまり水なんだい。どこでやっていたんだい。

ミュート — 「イン・オブ・クロンターフ」だよ。君も行くべきところさ。

ジュート — そっちの方に君がいると、君の声が聞きづらい。僕が君であるかのように、もうちょっと君の言っていることが分かるようにしてくれ。

ミュート — フホ、フホ、不本意かね。ポホルー！、ポルー、【ブライアン・ボルは11世紀の最初のアイルランド王。クロンターフの戦いで落命。】あの篡奪者のことを持ち出すのは！ 奴のことを思い出すと、怒りで震えて来るよ！

ジュート — ちょっと待ってくれ。過去は過去とすべきだ。君が躊躇しないうちにチップ付きで金をやろう。サア、銀貨だ。オーク材だけれどもね。うまいギネスでも飲んでくれ。

ミュート — 硬貨か、奴のことだな！ あのお馴染みの奴だ！ 記憶から消しがたい灰色の外套を着たシトリック・シルケンピアド【デー人率いてクロンターフの戦いで、ブライアン・ボルと戦う。ここではHCEの人格を持つ】だ！ ダブリンのバーにとっては上得意客だ！ 吠え哮る老いたるサケめ！ 奴はあの重要な地に侵入したのだ。(17)剣闘士としての服を着ているかと思えば、小便小僧の像の様な、吝嗇家の薄のろにもなる。

ジュート — 彼が殺されたのは、単にあの嘘っぱちの短編歴史家タキトゥースが予言していたように、彼がこの土地に手押し車1杯分のゴミを捨てたからにすぎない。

ミュート — 小川のよどみのそばの1区画に、まさに丸く固まった岩【大便】を落としたのだ。

ジュート — オヤマア、何と！ どんな音をたてたのだ。

ミュート — クロンターフの牛が落とす時の音に似ているな。吠えるミヤマガラス、うろつくイエネコめ！ 僕は奴に僕が座っている地峡近くの、泡立つ岬について話してやりたい。内側が毛で覆われているズ

ボンをはいたブライアン・オリン【アイルランドのバラードの中の英雄】のようにね。  
 ジュート ——— ボイルドイルやレイハニー【どちらもダブリンの1地区】にいる僕としては、君のような吃音の特殊言葉だと、何を言っているのか初めから終わりまで理解出来ない。こんな吃音は今まで聞いたこともないし、汚らわしい。僕の見えないところにいてくれ！ 君と一緒にいるのは全くのお断りだ。

ミュート ——— 全く同感である。でもちょっと待って。少しの間この半島を歩き回ってくれないか。そうすれば、このエルタの平原がどんなに古くからあるか分かるだろう。我が祖先とハンフリーと我々の土地であるこの平原は、チュウシャクシギがツチスドリに対し、潮が満ちた低湿地のことで嘆きの言葉を伝えたいと思う場所であり、また地峡の法則によって都市が生まれる場所であり、麗しい少女が最初から最後まで領主の初夜権の管理下に置かれる場所である。アイルランドの人々に思い出させよ。甘い急流と塩辛い急流とがここで合わさるということ。母親が悲しみながら子供を育てる地なのだ。東で激突した彼らは暴徒となったものの、ここで衰退してゆく中、落ち着き払い、憩いの世界へと入るのだ。無数の命の物語がこの浜辺近くに落下する。それは雪片のようにヒラヒラと飛び、高みから落ちて散乱し、旋風の世界の最悪のブリザードのようになる。今やすべての人間が盛り土の墓の中に入っている。氷の地のあちこちに、大地のあちこちに。誇り、アア、誇り、それがお前たちの報賞なのだ！

ジュート ——— 悪臭漂う話だ！

ミュート ——— そのままの状態にして。この下に彼らは横たわっているのだ。大なる者も小なる者も、毎夜命ある者は異邦人【死者のこと】となり、ちちち小さなネズミが多量に住む巨大な住処バビロンを作り上げている。平等に扱われた者と平等に扱われなかった者とが。それと同様に、アルプとイアウィッグが、溺れた者と焼かれた者が、愛に満ちたこの盛り土の墓の中に入っているのだ。

ジュート ——— (18)死か！

ミュート ——— 優しく穏やかに！ 荒々しい波によって無に導かれるのだ。悲嘆の歌。

そして古代からの死の盛り土は、彼ら皆を飲み込んできた。幾年もの間、この我々の大地は墓碑銘が尽きることはなく、人間は同じことを繰り返してきた。ルーン文字が読める者は、四つん這いでそれを読むかもしれない。古い城、新しい城、3つ目の城、これらが崩れていく！ 実際ダブリンの真の運命について言ってくれ。お粗末な運命だろうが。しかし静かな声で言ってくれ、造話君！ 静かに！

ジュート ——— なぜ静かになんだね。

ミュート ——— 金髪の妖精アンナと一緒に、巨大なハサミムシがいるからさ。

ジュート ——— どうして。

ミュート ——— ここにバイキングの墓があるのだ。

ジュート ——— 何だって！

ミュート ——— 驚いたかい、ジュート君、

ジュート ——— 雷に撃たれたかのようなだよ、シングモート【バイキングが集まり法を作ったダブリン市内の小丘】か。

(身を屈めてください) この土の本について想像力を働かせることがないのなら、(どうか身を屈めてください) この文字は何と奇妙な記号であることでしょう！ あなた方に(我々とあなた方が既にその文字を明るみに出してしまったが故に)この語を読み取ることが出来るのでしょうか。あらゆる物事について同じことが言われています。数多くのことに。異種族混交集団と関わりあう異種族混交集団について。心地よく心を刺激する話。彼らは生き、笑い、愛し、去ったのです。おそらく。あなた方のシングモートはメディア人やペルシャ人のものとなるのです。こうしたことは、ぼんやりとした頭脳の持ち主たちが大地を歩き回った時代における、失われては再び蘇る、ハイデルベルク人的異邦人についての、ネアンデルタール人的古のとりとめのない話です。その行為は無知の中でなされましたが、その無知は印象を意味し、印象は知識を編み、知識は名前と形態を見だし、名前と形態は機知をそそり、機知は接触を運び、接触は感覚を甘美にし、感覚は欲望を惹起し、欲望は愛着に固執し、愛着は死につきまとい、死は誕生を台無しにし、誕生は実存の確実性を内包するのです。しかし人間は彼の臍【誕生の象徴】から神の化身を祭る祭壇背後の飾り壁【死の象徴】に到達するまで慌ただしく時を過ごします。地上に住む者はこのことをはっきり示しています。奇妙な形で、不安定さを伴い続けながら。手斧、石斧、鋤の刃があります。これらの目的は、鋤を引いている牛のように行ったり来たりして常に大地を壊すこ

とにありました。武装し、馬に乗っている戦争好きの小立像がここで何か言っています。馬に乗り、武装している戦争好きの小立像がここで何かを見えています。更にこの彫像は、相手を負かすための火打石と呼ばれる、戦闘開始を告げるもののためにあるのです。東を向いてみろ！ ワッ、何ということだ！ 西を向いて見る！ アア、ひどいものだ！ こんなものはくるんで投げ捨ててしまえ！ 直視出来ない！（19）ある小さな部分が全体の役割を果たすのなら、すぐさま我々はアルファベットを使用することになります。ここに（どうぞ身を屈めてください）銀色の小さなかわいらしい球【銃弾】があります。兵士の総数に関わる球であるが故に、それはきわめて特異な関心を見ている者に持たせます。垂直の植物の繁茂したぼろぼろの岩々があり、それらとともに、その結果はともかくも、激しく言い争っているオラウンタンがいます。実際、本当に、なぜこのようになっているのか。あたかもどこかの愚か者に裏切られた者が、復讐のために突き刺したとでもいつているかのように、土壤に突き刺してあるルーン文字のためなのです。【そこに書かれてあるもの】すべてが何とひどく古臭く乱雑状態になっていることか！ 色々なものの貝塚のような堆積所です。オリーブやビートやキャラウエーや手押し車やアルフレッドやビーティーやコルマックやドールトンが詰め込まれています。フクロウの卵（アア、どうか身を屈めてください、どうか！）がここにあり、ギリシャのチーズもあり、すべてが弱々しく、昔の世界がよろめいた姿となっています。これらは1片の雑草ほどの価値もありません。シュシュシュ！ 見てください、あらゆる方向で蛇がぐねっています。我らのダブリンは蛇であふれています。蛇は三角形の土地から我らの島に海を越えてやって来たのです。禁じられた果物であるリンゴの船荷のただ中で育ちながら。しかしながらパディー・ウィップンフム【パトリックのこと】が上陸し、ゴミ入れを使って、蛇たちが這ってくるのを防いだのです。オスマントルコ人が女の下着を盗めるよりも素早く。こうした状況が起るのは少なくなったり多くなったりしますが、こうした話は同じような形で繰り返されます。不法者や密輸者が現れて。

斧を使って次々に打ち殺している。雄牛を打ち殺すように。1匹、1匹、1匹、全部で3匹、そして目の前の1匹を。2匹と1匹は3匹になるのが妥当な線だ。そして後ろにいる1匹を。まず手始めに大蛇を、そして3本足の子牛を、そして何かを伝えようとしているグレーがかった象牙色の雌馬を。そして記憶しているところでは、諸聖人の祝日まで、目方で111ポンドほどあったその子馬たちを。何と取

り留めなく繰り広げられるネアンデルタール人的な話だろうか！ アイルランド不法居住者、反不法居住者、後の反不法居住者から見て、何という結末を伴っていることか。これで我々に我が国の一般男性になれと言うのか、この土地の息子に、息子に、孫に、ソウ、緑の地の孫に！ 我々、我が国の一般女性、アナの娘たちにはそう【暴力的なアイルランド人に】ならないように言っているのに。非難されるべき祖先たちよ！ 永遠に続く忌まわしい話だ！

実際その時代、荒地や壮麗なる山岳にはざら紙もなかった。またペンも解放してもらえる慈悲を求めてうめいている段階だった。すべては古に属していた。あなたは私と縁を切り（その結果を見てごらん！）、私はお先真っ暗な状態になった。私は1ポンド貨をもらえるかあなたに問うたが（何と交換だっけ？）、あなたは刑務所に入ってしまった。しかしながら、心に留めてもらいたいことだが、世界の人々は常に、あらゆる出来事についてルーン文字で書き続けているし、書き続けてきたし、書き続けるであろう。（20）眉間に血管を鼓動させつつ、我々が非理性の呪いの下で行ったあらゆることを。ミルクを飲ませてくれる最後の駱駝を、彼のものであるナツメヤシと彼女のものであるヤシとが結ばれている、彼の魅力的な従姉妹の墓の前にしっかりとつなぎとめておくことが出来ないうちから。しかし角笛も飲酒も恐怖の日も今はない。骨と小石と羊の皮があるだけだ。絶えずそれらを料理用にと砕き、裂き、切り刻み、グズグズいつている埧塙の中に入れて温めておけば、グーテンベルグがマグナ・カルタのような憲章と、インク壺と大きな18ポイント活字とを使って、最終的に万人のために印刷機から朱刷りを生み出すに違いないのだ。コーランの中でも、これ以上の美德は見出すことは出来ない。というのも、これが（このことに重大な関心を持っている者が警告していることだが）紙が必要とされていること、紙がそのために作られていること、紙が隠していること、紙が暗に示していること、紙がミスプリントとして失策することだからだ。そしてついにはあなたは（これで終りという訳ではない）イメージ・形態氏、場面夫人、そしてすべてのちょっとしたお偉いさんたちと出会うようになる。ここで終止符が打たれる。それ故あなたは、ダブリンのこの巨人（罪人であろう彼の額が泥で黒ずめばいい！）についての書全体【『フィネガンズ・ウェイク』自体のこと】において、この書を開きそれを閉じる聖者が現れる聖なる時まで、どのようにすべての語が束ねられているか、そしてまた、イメージ・形態、場面に関して70通りもの読み方がどのようにもたらされるの

か、私に言う必要はない。

まだ飛んで行ってはならない！あと何マイルも、人間にとっては70マイル先に行っても飛び去ってはならない。公園はろうそくの火程度の明るさで非常に暗い。しかしあなたが手に持っているものをご覧あれ！この可動物【『フィネガンズ・ウェイク』自体】はすべてゆっくりと動き、パタパタと曲がりくねりながら、せわしないあらゆるハサミムシについてのちょっとした物語へと向かっている。1匹はジャコウソウの上に、2匹はレタスの葉の後ろに、3匹はイチゴの苗床の間に。そしてヒヨコたちは自分たちの歯をほじり、ロバは楽しそうに鳴き始めた。あなたのロバにこの話を信じるかどうか聞いてみよ。するとロバはただ後足をよたよたと動かすだけだ。これから話すのは40人の子供を持つ女の話だ。というのもその頃は【子供を持つことに対する】希望が高まっていた時代だったからだ。またノアと気持ちにむらのある妻の話でもある。至って真面目な男と軽薄な女の話、また金が不足している金ぴか族の若者たちの話、いたずら好きの女が男にさせたことについての話でもある。結婚に失敗した男は、女が無分別に飛び回ることに、また彼女がかなりピュラ【ギリシャ神話の中で、ノアの洪水の際救われた。デウカリオンの妻】的女性であることによって、逆の性格へと変わったのだ。ソウ、確かに、このずる賢い彼女は放蕩なのだ。あの尻軽さから将来のパトリック的人物になれるのだろうか！この気まぐれな、恋人に向けるようなまなざしに覆いをかぶせよ。彼女は駄目よという言葉をも効く雌犬の勝者なのだ。いかがわしい淫売宿で流れていよ、アン。娼婦め！ソウ、確かにその言葉は彼女に対する言葉であって、我々に対するものではなかった！デモマア、いいじゃないか、紳士諸君、(21)ハサミムシが出現しようとしている。本当にちっぽけなハサミムシが。以下のように！あたかも彼はそれを知っているかのようだった。耳を澄ませてみよ！耳を澄ませて！私はそうしている。静かに！角笛が嘆願している！そしてハーブの音色が戯言を言っている。

はるか昔、石器時代、アダムが穴を掘り、彼の妻が波紋絹布を織っていた頃、すべての者が暗い夜の山の住民で、すべての最初の合法的なあばら骨の窃盗者【女のこと】が愛に悩む男の目をとらえる独自のやり方をもち、すべての男が妻以外のすべての女と愛し合いながら生活していた頃の、ある夜遅くのことであった。ヤール・ファン・フーサーは、冷たい手を彼自身の上に置き、燃える鬼頭をランプのつり下げられた部屋の中で高くそびえさせていた。そして2人の幼い双子、我々の親類であるトリストフ

ァーとヒラリーは、城である土で出来たその家の油まみれの布が敷かれた床で、自分たちの人形を蹴っ飛ばしていた。そして、どういうことか、誰だろう、フーサーの義理の姪であるプランクウィンがこの居酒屋の本丸にやって来る。プランクウィンは【下着を引き下げ】バラ色のもの【性器】を取り出し、ドアに向かって排尿した。そして彼女が火をつけると、火の世界が燃え立った。そして彼女は卑しいパリジェンヌ風の声でドアに呼びかけた。サア、最初の言葉を聞きなさい、何故私はビール1杯分のおしっこをする格好をしているの？そして次のような具合で諍いは始まった。女の言葉にもかかわらず、ドアは令嬢に対してフン！と言い、自分は開くことはないと言ったのだ。そこで令嬢は悪意をもってトリストファーを誘拐し、その後荒野の中へとひたすら駆けた。そこでヤール・ファン・フーサーは柔らかな愛の声で、無線で彼女にこう呼びかけた。やめてくれ、泥棒はやめてくれ、アイルランドの私の店に戻ってくれ。しかし彼女は彼に、出来ないことだわ、と答えた。そしてアイルランドのどこかに天使が舞い降りるその同じ安息日に嘆き声が聞こえてきた。そしてプランクウィンは40日間世界を歩き回り、その双子の1人の愛の斑点【梅毒のかさぶた】の祝福を、銀色の染みの付いた石鹸で洗い流し、4人の老いた博士をして愉快的な気持ちになることを彼に教えさせ、1つの確かな徳に向かわせると、彼はのらくら者になってしまった。その後彼女はひたすら走り始め、そして、何ということか、再び2年後別の機会にエプロンドレスを着て、夜遅く双子のうちの1人を連れ、ヤール・ファン・フーサーのところに戻ったのだ。そしてどこだろう、彼のバブへとやって来た。ヤール・ファン・フーサーは傷がむき出しになったかかとを穴蔵の麦芽の中に突っ込み、熱い手で自分の体の1部をしごいていた。また双子のうちの1人であるヒラリーと人形は、(22)1度目の空想に耽り、兄弟姉妹のように破れたシーツの上でじゃれあい、咳をしていた。プランクウィンは淡い色合いのもの【マッチ棒】を摘み出し、火をつけると、その赤い雄鶏はとさかから炎を吹き出した。そして門の前で排尿しこう言った。サア、2度目の言葉を聞きなさい。何故私はビール2杯分のおしっこをする格好をしているの？すると門は悪意をこめてフンとこの令嬢に答えた。そこで令嬢は考える間もなく、双子のうちの1人を下に降ろし、双子のうちの別の1人を連れて、誰も知らないところ目指して、百合の咲いている道をひたすら走った。そしてヤール・ファン・フーサーは大声を爆発させ、彼女に向かってこう訴えた。やめろ、馬鹿げたことはやめろ、私のアイルランドの店に帰ってこい。し

かしプランクウィンはこう答えた。好きでやっていることなのよ。そしてアイルランドのどこかで星がパッと光る聖ローレンスを祝う晩に、昔の大きなわめき声が新たに激しく湧き起った。そしてプランクウィンは歩いて40日間世界中を巡った。そして手の先端の爪を双子のうちの1人に食い込ませ、クロムウェルが発したような呪いの言葉を彼に浴びせた。そして4人の道化的監督者をして彼に涙を教えさせ、面倒をかける心配のない人物に彼を作り替えると、彼は悲しみの人となった。その後、彼女はひたすら走り始め、年が2回変わった後、何ということか、再びヤール・ファン・フーサーの家とラリーヒル【パブ?】に戻り、ヒラリーをエプロンドレス姿の彼女と一緒にいさせた。幸運をもたらす3度目の夜遅く、館の門衛に止められた訳でもないのに、一体何故彼女は立ち止まったのか。ヤール・ファン・フーサーは嵐に見舞われたその腰を食料収納箱の上に下ろし、4回肚の中で反芻した(アア、何としたことか! アア、何としたことか!)。そして双子のうちの1人悲しみの人トリストレスと人形は、テーブルクロスの上で、卑しい悪童と純朴な花嫁のように、互いにキスしたり、つばを掛け合ったり、いたずらしたり、突っつきあったりし、2度目の空想に耽って愛し合っていた。そして彼女が白いもの【紙】を拾って火をつけると、その谷間はきらめいた。彼女は凱旋門の前で排尿し、こう尋ねた。3度目の言葉を聞きなさい。何故私はビール3杯分のおしっこをする格好をしているの? しかし次のような具合で諍いは終わったのだ。というのも、稲妻型の叉に分かれた槍をもってキャンベルがやってくるように、デーン人にとっての老いたる恐怖の的ホアネルゲス【「雷の子ら」の意味】たるヤール・ファン・フーサーが、苦しい状況の中、窓を閉じた3棟から成る邸宅から伸びるアーチ道を通ってやって来たからだ。幅の広い生姜色の帽子をかぶり、都会風のカラーを襟につけ、ふち取りされた完璧な皮服、彼自慢の靴下と手袋を身につけ、バイキングの首領ロドブロクが着ていたような先の細いズボンをはき、腸弦の弾薬帯を肩からかけ、(23)赤みがかかった黄色い、青と緑の色も入っている服を着た、怒りで顔を蒼くしているオレンジ党員のように、毛皮が付いている特製のゴム長靴をはいて、射手が持つ頑丈な長柄の矛が届くところまでやってきたのだ。彼は荒れた手を打ち鳴らして留め金をパチリと締め、気のおかしい女にその行為をやめるように厳かに求めた。そしてこの気のおかしい女はその行為をやめたのであった(ゴロ)。そ

して彼らは皆気ままに飲んだ。というのも、アルコールが入ると大胆になる1人の男が、肌着をつけた少女に常にマアママお似合いの人物だったからだ。そしてこれが炎に包まれたり、洪水に見舞われたり、大風の吹くこの世界において、この文盲の門衛にとって初めての平和だった。こうしてこの門衛は、この誘拐者である、異邦人の女に快く門戸を開放したのだが、何と彼は未熟であったことか。今までご覧になったであろう通りである。私とあなただけの話だが。プランクウィンは彼女の操り人形を支配したのであろうし、男の子たちは平和の波を保ったであらうし、ファン・フーサーは恐れ of の気持ちを抱いたであらう。このようにこの市民の話は都市全体に愉快な気分をもたらしているのだ。

アア、幸運なる過ちを犯したフェニックス公園の不死の罪人よ! 極悪から最善が生まれるのだ。丘と小川が一体となって場所を占めている。誇りに思うことにしよう。胸を張ってどっしり構えていよ! 過ちがなければ、その根無し草としての秘密を、スカンジナビア人やアイルランド人にこれらが囁くことはないであろう。何故あなたは黙っているの? ハンプリーは何も答えない! 一体急いでどこから来たの? リビアなら答えないだろうか。しかめ面をした彼の頭の上には冠のようにウールの帽子が乗っている。「聞きたい」と思って、彼は耳を澄ますであろう。それが近くのネズミの立てる音なら、遠い東の方での戦いの音なら。見よ、谷間は黒ずんでいる。あれやこれやの話について、唇を使って彼女はずっと舌足らずの口調で話す。彼女は笑わざるを得なかった。もし彼が彼女の言っていることを理解出来たらいいのだが。残念なことだ! 彼は理解出来ずに我慢している。その【彼女の】声の波は彼の心に打撃を与えるものだ。それはその高らかな音色で彼を欺く。その轟音の波、言葉を発した者の波、くくく口ごもりの波、その落ちこぼれの人のことは気にかけないで、私の言葉を聞いて、という言葉の波は、隣人の女主人が取り囲んで嘲笑い、子孫、乳児、乳飲み子が常時あきれかえる彼、彼が持っているパンを我々がむさぼり食う【キリストのイメージ】この人物、嫌悪感を催させるこの人物の背けた顔に対し、朝刊は次のことを告げるかもしれない。もし昔から存在する神聖なる彼のもの【ALPのこと】がないのなら、恥じらいの息づかいをする彼女がないのなら、我々がその生活ぶりを酒の肴にする、唇に唇を重ねるこの人物がないのなら、棚ぼたの幸運に対する彼女のちょっとした目配せがないのなら、我々のパンと水の与え手がないのなら、この町には聖なる尖塔も、埠頭に浮かぶ船も、いやもっと平易な言葉で言えば、(24)新しいダブリンにお

いて、溢れかえる灯光の中でごまかし合いをするあなたと私も存在しないであろう、工具もないし鐘の音もないし、うなずいて便所に行くと暗に告げる仕草も、何1つとして存在しないであろう、と。

彼は耕作の技術を駆使して、自分1人で作物を植え掘り出した。すべてのものは彼に属していた。彼は生活している者を助けるために額に汗して働いた。そしてこの飛翔する竜はパンを得た。そして我々のために法を作った。そしてすべての力を尽くして災いから我々を救った。この偉大な自由人ハンフリー・チムデン・エアウィッカーは。そして何と我々の最も崇めるべき祖先は、火が興っているマントルピースにほてって、耳元からもう一方の耳元まで赤くしながら、その窓つきの家の中で、よりよい方法を考えつくまでそうしていたのだ。そして草のささやき声が、再び彼を目覚めさせることができるならば、再び彼はそうするであろう。不死鳥が灰の中から蘇る時、再び彼はそうするかもしれない。そしてもし年長たる者によって若い者に真実が伝えられるならば、再度そうなるだろう。僕の結婚式用のワインをもっているかい。君は花嫁とベッドとを運んできたのかね。僕の愛する者に対して歓声をあげてくれるか。通夜の時はどうかね。ウィスキーさ！

あなたの魂を悪魔から守り給え。私が死んだと思ったのか。【バラッドにおける、目を覚ました後のティム・フィネガンの言葉】

さて、ご立派なフィネガンさん、気楽になさって下さい。ペンションで暮らす神様のようにゆったりとした時間を過ごして下さい。そして人前に姿を現さないようにお願いします。ただただヘリオポリスに姿を隠して下さい。カピラヴァストゥ【仏陀の生地】の道路はカルバリの丘【キリストが磔になったところ】の件の後、あんなにも曲がりくねってしまったし、それと同じようにノーサンバーランド通りも、フィブスバラにおいても、ワトリング通りも、ムア南通りも曲がりくねってしまい、そしてまた路上では、霧の滴であなたの足が濡れてしまうからです。病に冒された年老いた何人かの破産者や、蹄鉄をぶら下げているコライ【聖パトリックの昔の名前】のロバや、カタチャンカ【ムハンマドの馬】や、汚い幼児をベンチの上においていびきをかいている売春婦などに出会ってしまうからです。そうするとまともな人生とは反対の方向に行ってしまうよ、本当に。世の変遷もこんな風に見劣りのものなのです。ニュージェント【ジェラルド・ニュージェント、16世紀の詩人】も知っているように、ダブリンを離れることは難しいことなのです。隣の通行禁止の原っぱ以上に青々としている清潔

な入り組んだダブリンを後にすることは。あなたの精霊を悲しませてはいけません。今いるところにいるならあなたは裕福になれますよ。そこでは恰幅のいい服を身につけ、血を求める鷹を描いたベストなどを着、トリイ島の土が害虫を寄せつけない冷たい川の近く、スズカケノキの下にある赤ちゃんだった時のあなたの巻き毛がついた枕の上で、あなたの当時の姿形と大きさを思い出しながら、最高の祝福を受けられるのです。そしてまた、ここではあなたは好きなものがすべて手に入るのです。小銭入れ、手袋、魔法瓶、ライター、ハンカチ、指環、傘など、火葬用の積み薪に入れる宝全部が。ホメロスや、ブライアン・ボルや、老いた支柱ロナン【6世紀のアイルランドの聖人】や、ネブカドネザルや、チングスハンらの魂がいる土地において。オンバー【トランプゲームの1つ】で楽しもうと思っていた我々がここに来ているのは、あなたの墓地を掃除するためです。(25)またプレゼントをもってきたのですよ、そうではありませんか、フェニアンさん。また我々はつばを出し惜しみなんかしていませんよね【医療行為としてつばを付ける医者がいた】、ドルイド教徒さん。【我々がもたらすものは】あなたが町の店で買うようなみすばらしいちっぽけな彫像でも、三文雑誌でも、私の目を背けさせるようなものでもないのです。野の産物なのです。数多くの贈り物を受け取った故、医師のファハーティー博士はあなたに体を良くする術を教えました。万能薬のケシの入ったお粥です。蜂蜜は今まで存在したもののの中で一番神聖なものです。蜂の巣箱もありますし、蜂の巣もありますし、イアワックス【耳垢のこと】もあります。これらは栄光への食料です(いいですか、ポットをとっておいてください。さもないとあなたのネクターの入ったコップは、あまりにも多くの光を発することになるでしょう)。それに山羊の乳もあります。メイドが昔あなたのところに運んだような。あなたの名声はバジリ軟膏のように広がっていくでしょう。というのもフィンタン・レイヤー【ファイフ(木管楽器の1つ)の名手】が海外であなたのことを、ファイフ【木管楽器の1つ】を使って伝えたからであり、ボスニアを越えたところでは、互いを呼び合うのに全世帯があなたの名前になんだ呼びかけをしているからです。ここにいる者たちはサーモンハウス【パブ名】の神聖なる屋根の下で腰を下ろし、豚のように頬をふくらませ、完璧なまでの神への誓いととも、あらゆるへこみにも聖人がいる、そうした記憶の器をいくつも持ちながら、常にあなたのことを語っているのです。そして彼らは我らの特別なる棍棒を賛美しています。それを高く掲げた手のひらの汗があなたを記念する印となっ

ているのです。これまでアイルランド人が嚙んできたすべての楊枝は、あの【あなたが眠っているマガジン】要塞の木材からくだけた破片なのです。もしあなたが【品物として】買われたり売られたりして、アイルランドの入植者たちがたくさんのもを詰め込んだ、その積み荷の1つから取り出され、そして女神の庇護を前にして、あなたのあらゆる箇所がほどかれたならば、それを見て労働者階級の人たちは、自由になることがどんなに容易なことか分かるでしょう。人々の話だと、(乾杯!)あの元気一杯の老いたるマイケル・ガン【ゲエティー座の支配人】は、みんなにとっては人生に趣を与えてくれた人だったそうですが、あなたにとっては入植者【新たに死の世界に入ってきた人】だそうですね。何ということでしょう。でも彼は負けじ魂の老いたるガンだったのです!彼は死んでいなくなりました。我々は彼の公正さの源を見出したのです。しかし百万本のろうそくに匹敵する明るさをもったタスカー灯台の目が、モイル【北アイルランドの行政区】の大部分の海を覆っている間、彼の巨大な手足や臀部に安らかさを与えたまえ!彼の1リーグにもわたるほどに長い最後の憩いとともに!話によると、偉大なるアイルランドにも、ブリテン島にも、いや、パイク州にも、あなたのような軍司令官は決していなかったそうです。いやあなたほどの王は、上王【2~5世紀のアイルランドの宗教的首長の称号】は、打ち据えられた王は、歌われた王は、吊るされた王はいなかったそうです。また人々の話によると、12人のわんぱく小僧が輪を作ることの出来なかった楡の木を倒すことが出来たり、リアム【ウィリアムの略】が持ち上げることの出来なかった石を高く持ち上げることが出来たとか。マクールという人物以外誰が我々の運を高めたり、葬式の時、我々の心の働きを理解出来るひょうきん者でいられるでしょうか。あなたがハックルベリー・フィンだとして、あなたのような人物が50人川に行った場合、その50人の中で大綱を撚って作れる人物は、あなた以外どのような人物だったのでしょうか、またそのような人物がどこにいたのでしょうか。あるいはクリケットのバッターの中で、あなたのグレース【英国のクリケットの名選手】ほどの腕前にかなうバッターがいたでしょうか。ミック・マック・マグナス・マコーリー【トマス・バビントン・マコーリーは19世紀英国の詩人、歴史家、政治家】はあなたを完璧な詩人に仕立てることが出来ます。(26)また革バッグ職人のレイノルドはあなたのランプのシャッフルやカットのやり方を真似しようとしています。しかしホプキンズのように、またホプキンズが言っているように、あなたは本物のエッ

グノッグ【卵に洋酒を混ぜた飲み物】飲みで、少しばかりおまけして飲ませてもらっていました。我々はこのホプキンズのことを、旅気違いと呼んでいる。小アジアのエルサレムに行ったからです【「エルサレムに行こうとする」で「酔っぱらう」の意味がある】。あなたはピートやジェイクやマーティンが持っていた以上の鬪鶏を持っていました。そして七面鳥の中でもあなたが持っている中で一番の七面鳥が、天使を祝うあらゆる祭日のために切り株状態にされるのです。それ故どうか7匹の害虫と、やけどするくらいに熱い紅茶を司る司祭である父、教皇が、あなたに決して近寄りませんように!というのも、あなたの髪が天国の中のリフィーの脇で一層白くなってしまうからです!天国の川よ、天国の川よ、そこは何と素晴らしいところか!英雄さん!あのバッグについて7回も我々はあなたに敬意を表しました!道具1式、ハヤブサの羽、ジャックブーツ【膝上までの革長靴】の入ったあのバッグ全体が、あなたがあの時それを投げた場所に今でもあります。あなたの心臓はオオカミ座の体系の中にあります。あなたのときかのついた頭は山羊座の一带にあります。あなたの足は乙女座の回廊の中にあります。あなたの幸せや驚きは靈魂不滅の場所にあります。今言ったことはあなたが生まれたという事実と同じくらい確かなことです。あなたの汚いマットレスは膨らんでいます。あの船室には麻クズとリンネルのシーツが敷かれてあります。リフィーへの孤独なさまよいは終わったのです。赤ちゃんさん、死んだままでいて下さい。憩いから覚めてはいけません。ツタンカーメンの墓の見張り人のような、チャペリゾッドの遺体の見張り人が次のように言っていました。俺はあんたを知っている、酒の器さんよ、俺はあんたを知っている、魂の助け舟さんよ。なぜって、裸の乞食さん、あんた、頼みもしないのにやって来るあんた、来たことが誰にも分からないあんたのために、クライスト教会や聖パトリック教会の、聖歌隊前唱者さんたちや文法学者さんたちが、あんたの埋葬という仕事について指図したあらゆることを俺たちがやってあげたのだから、と。海の男の塚の中で、ぐっすりお眠りなさい!

あらゆる物事が前と同じように進んでいます。いや、この古い家屋敷においてそうであることが、私たち全員の心に訴えかけるのです。私のおばのフロレンツァにとって不幸なことに、聖域のあらゆるところに棺が置かれています。朝食が出来たことを知らせるのに角笛が、昼食時と夕食時には銅鑼の音が聞こえます。ビリー1世【ウィリアム1世のこと】が王の位についており、マン島の議員たちが議会に集まっている、といったような国民全般のことが



【同じように進んでいます】。同じ店が窓から水をまき散らしています。ジェイコブ【ジェイコブズ・ビスケット・ファクトリー】の文字のついたクラッカーも、ティブル博士のヴァイ・ココアも、マザー・シーガルのシロップの脇にあるエドワードの粉末スープも【前と同じです】。ライリー・パーソンズが失敗すると肉の値段が落ちました。石炭は不足していますが中庭に丸太がたくさん置いてあります。大麦は色が悪く再び値が上がっています。子供たちは学校でいつもの授業を受け、ためらいながらも完璧に文字のスペリングを書いており、また九九もそらんじています。彼らは本中心の生活で、(27)ぼんやり眼鏡のトム・パウやオナニー好きのティミーに石を投げたりする者など決していません。実際それが真実なのです！ そうではありませんか、ローマ・カトリック教徒さん。彼らが生まれた朝に、あなたは柔軟な心をもった先祖でしたが、頼りがいのある人物のあなたが、愛の腕が知っていることを把握した時、あなたは完全に先祖となるでしょう。ケヴィンは天使の頬をもったまさに悪童で、壁に落書きをしたり、小さなランプと制服用のベルトといたずら用のバッグをもって、借家人の戸を郵便配達人として叩いて回ったりしました。【一方ジェリーについては】もし彼の飲むスープがミルクだったら、あなたは彼の脇に彼の剣があっても大丈夫でしょうが、しかし、何ということでしょう、悪魔が時々可愛い小生意気な遊び好きのジェリーの中に入り込み、この子は彼の最後の残り物（大便）から赤紫色のインクを作り、彼の裸のからだに青い縞模様を書くのです。ヘティー・ジェインはメアリーの子供です。彼女は象牙色がかかった金箔の服を着て、幸福なる日に再び炎をともすためにやってくるでしょう（というのも、彼らは自信をもって彼女を選ぶでしょうから）。しかしエシー・シャナハンはスカートの丈を長くしてしまいました。ルーナ修道院にいた時のエシーを覚えていますか。彼女は唇がイチゴのように真っ赤で聖なるメアリーと呼ばれていました。また過激な炭坑夫たちが彼女を巡って暴動を起こした際、彼女は「純粹美人のピア」と呼ばれていました【pia e pura bella—「敬虔で純粹な美女」のもじり？】。もし私がウィリアム・ウッズ・マニュファクチャー【ジャムの会社】の事務員に任じられたら、そうしたすねた奴らを町の柱という柱にくくりつけてやります。彼女は2度、夜に、ラナー【カティー・ラナーは19世紀のバレリーナ】の家で自分の【ダンスの】レポートを披露しています。「くるくる回るマギー氏」【歌の名前】を、テイバー【小太鼓の1種】を打ち鳴らすタムタム奏者と一緒に。平坦なカチューチャ【スペインのダンス】の

リズムをとって踊ります。これを聞けばあなたも楽しい気分になるでしょう。

サア、心安らかに、礼儀正しいあなた。あなたの膝を穏やかなままにして【膝で隣にいる死者を蹴飛ばして起こすな】、静かに横たわり、あなたの榮譽ある貴族の立場を保っておいて下さい！ 彼をここにどめおきたまえ、エゼキエル・アイロン【レ・ファニユの『教会墓地のそばの家』の中の教会役員】よ！ 神があなたの力を強くし給わんことを！ 諸君、彼が感知しているのは、我々の熱き精神でありアルコールだ。ディミトリアス・オフラゴナン【歌の名前】よ、一族の重要人物のためにあの治療液のコルクを開けてくれ。ポートベッコ【ダブリンの1地区】にいた時以来、ポメロイの町【北アイルランド、ティローン州にある町】を浮かすくらいにあなたは酒を飲みました。パット・コイ、この近くから取ってきなさい。パム・イェーツ、サア、君も取ってくるのだ！ 魔女を恐れてはいけません！ ここにはリンボがあります。そこでは霧が包み、干渉者が1人もいず、奇跡が次々と起るのです。アア、眠たいのですね！ そうならそうすればいいでしょう！

奇人のベハンや老いたケイトや執事には私が目を光らせています。私を信用して下さい。彼女はごまかすことなく、戦争の記念絵はがきを売ることによって私が記念館を建てるのを手伝ってくれるでしょう。あのチップのねだり屋さん！ 私があなたの罫を外してあげましょう！ この点は必ずやりませ！ またあなたのために時計を進めておいて差し上げましょう。そうしましたよね、しませんでしたっけ、私たちと同じ吃音者さん。それ故あなたが困るようなことは全くありませんよ。またあなたの面影を捨ててしまうようなこともしません。船尾外車は力強く回って進むでしょう。(28)私はあなたの奥さんを広間で見かけました。アイルランドの女王のようでした。イヤイヤ、それにまたまさに素晴らしい女性でした。何もおっしゃらなくて結構です！ 握手をしますか。嘘つきの悪であるあなたは、嘘つきの悪である私にあのまるまるとした女性、非常に健康的なあの子を見せてくれました。握手しましょう。彼女の聖なる汚い足以外、彼女には不穏当なところは1つありません。大胆な牝猫タイプはあくびをし、笑い猫としての時間を、ストールの上の、ポロックス社製の毛織りの丸いクッションの上で過ごし、仕立て屋の娘である彼女が夢を縫い合わせているのを、最後の一针まで見つめています。彼女がその魅力を燃え立たせる冬を待っている間、今よりももっと多くのひな鳥をおびき寄せ、煙突から落とすしてしまう、彼女のそうした姿もその猫は見つ

めています。どんな雪崩も猫の食糧をすべて吹き飛ばすことはありません。人間の中で最高の人物のあなたがそこにいて、この意味を説明し、また彼女に金銀の尊さを語ってくればいいのですが。もう1度唇を濡らすことになるでしょう。あなたが馬車で彼女をフィンドリニー市場まで連れていったときのように。この時、自分が陸にいるのか、海にいるのか、飛行機のように青空を舞い降りているのか、彼女には全く分からないくらいに、色々なところで素晴らしい手綱さきをあなたは見せました。彼女は当時気が多い女性でしたが、今でもフワフワした気分です。彼女は低音で歌うことが出来るし、また1日の終わりを告げるラップ吹奏が終わると、醜聞を楽しげに話します。上等な羊の脇腹の肉や梨を渡されるのが彼女は好きです。こうした食事の際、コルカンノン【キャベツなどの野菜とジャガイモを煮込みつぶした料理】やアップルダブリング【小麦粉の皮にリンゴを包んでゆでるか焼いたもの】が出た後、夕食時にうたた寝をしたことがありますし、また車椅子に乗って『イブニング・ワールド』を読んだりもします。この時着ている床まで届くコートやスワガーコートを見ると垢抜けています。新聞はニュース、ニュース、すべてニュースです。人が死んだことや豹のことやフェズ【モロッコの都市】で農夫が殺されたこととか。北アイルランドの議会での怒号が飛び交う場面とか。新婚旅行用の服を着ている人に幸福をもたらす星が流れたそうです。中国での洪水とともに、人々にとって公平な機会として訪れます。我々は次のような好ましい噂話を聞いています。愚か者のトムは同じく悪童であるハリーのことを言いふらしています【シエムとショーン】。くすくす笑いの少女【イシー】は、自由に改作され『ノルウェー人の妻』となった、連載小説『恋人とニチニチソウの愛』の中に絶えず自分の進むべき道を求めています。彼女がついに涙を流す夜、塩辛い海の墓場でもブルーベルの花が咲くでしょう。それで終り。でもこれが【あなたが起きて向かおうとしている】あちら側の世界なのです。そしてついには時間の経過が分からなくなります。その世界ではいかなるシルバー・アッシュ【木の1種】も入れ毛もなくなってしまうのです！ ろうそくの炎が揺らめいている間に。復活など、馬鹿なことを言わないで下さい！ 彼女は最も高貴な方で、きわめて貴重な方だ、と自称競売の団体アダムズ・アンド・サンズも言っていました。彼女の髪は相変わらずブラウンです。見事にウェーブを描いています。サア、お休みなさい！ フィンさんはもう要りません！

というのも、誰かが話してくれたことですが、それがあなたと同じ名前をもつ、釣り針の刺さったサ

ーモン【フィンはその知恵を調理したサケの脂を口にしてから得たといわれている】の化身であろうとも、(29)100本の瓶があるこの家の敷地に、大柄で赤ら顔で背の高い放蕩な男が既にいるからです。この違法な店の景気は良好です。市長閣下のように、またバオバオバオバブの木のように。この木は死んだ小枝を風下に落とし（何ということだ！）、しかし1ヤードの長さをもつ（よくやった！）きれいな枝をそよ風が吹いてくる側へと上に伸ばし（見せびらかすために！）、醸造所の煙突の高さをもち、フィニアス・バーナム【アメリカのショーマン】のように下部が幅の広い木です。肩を弓なりに曲げて身体を低めた【亀背】この男は、大変に偉大な墮落者なのです。あばたの跡が残っている、感染症にかかったことのある蛸たる妻と、3人のシラミだらけの小さな子供たち、そのうち2人は双子の男の子、1人は小柄な乙女がいます。そして彼は呪い、再び呪いました。彼は4人の愚人たちが見たことをしているところを見られたのです。またスパイたちが知っていることを見るのを決してやめなかったのです。ほくそ笑んでいる目撃者には暗影が立ちこめるだけでしょ。公正なる彼とか弱い彼女についての情報はこういったことでお役に立つでしょう。もっとも、東の国の人か西の国の人にこのことについてほらを吹きながらしゃべってしまったのだけでも。また星がこのことの映像を永久に天空に映し出してしまったのだけでも。創造者である彼は、彼が創造した者のためにある創造物を創造しました。それは反動的1神教論者だったのでしょうか。共産主義的僧職政体論者だったのでしょうか。この2つが合体したすべての左翼に近い予言者だったのでしょうか。まさにそうだったのです！ しかしどうであれ、1つ確実なことがあります。シャリフのトラー【モーゼ五書のこと】が請け合ったことであり、マプピク【ヘブライ語のアルファベットで、発音上の区別を示す符号】が公言していることです。この男、安っぽい太陽閣下のHCEは、幾分酔っ払いながら我々は思ったのですが、しかし名のある家柄の名士として、我々が教区の世界の中で1日1日を生きているこの由緒あるところにやってきたのです。この群島を最初に訪れた帆船であり、船首像として舳先に柳模様のある、すべすべした肌の女の像をつけた一雙のタービンをもつダウ船「ダブリン湾」号に乗って、この独り乗りの船の船体に大酒を詰め込んで、海の深みから水をしたたらせて昇ってくる死海のジュゴンのようにしてやってきたのです。そして以来70年間ずっと彼は魚の行商人のように同じ言葉を何度も口にしながら自分を責め、常に傍らに彼のシェバ【妻のこと】を置き、

ターバンをかぶりながら白髪となっていき、サトウキビの糖をセルロース的澱粉へと変えています（あらゆる物事が彼にとって終焉となったのです！）。そしてまた同じように確実なことは、彼は飲み助でその腹をふくらませて巨大にしているということ、我々のこの老いた犯罪者は、性来謙虚で、親しみ深く、近親相姦的だということです。ただその本性が何であるかは、あだ名がひどい言葉で彼に付けられた後になって、我々は推し量れるかも知れません（これを悪く思う者にこそ災いが訪れるのです！）。そしてまた確実なのは、彼のことを総括すると、50歳ではあっても真面目で考えの深い人間であり、彼は彼であり、究極的にエデンの園での騒ぎを引き起こしたのは、他ならぬ HCE となるということなのです。

### （注）

『フィネガンズ・ウェイク』の原典は、James Joyce, *Finnegans Wake* (New York: Viking Press, 1947) を使用した。本文中の（ ）内の数字は、*Finnegans Wake* の原典のページを表す。【 】内の日本語は、該当箇所の内容を筆者なりに解説したものである。（ ）内の日本語は、原典の（ ）内を訳したものである。参考文献としては、以下の書を使用した。

1. Anderson, John P. *Joyce's Finnegans Wake: The Curse of Kabbalah* vol. 8. Boca Raton: Universal Publishers, 2013.
2. Campbell, Joseph, and Henry Morton Robinson. *A Skeleton Key to Finnegans Wake*. rpt. New York: Viking Press, 1944.
3. Glasheen, Adaline. *A Third Census of Finnegans Wake*. Evanston: Northwestern University Press, 1963.
4. McHugh, Roland. *Annotations to Finnegans Wake*. Revised edn. Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 1991.
5. Mink, Louis O. *A Finnegans Wake Gazetteer*. Bloomington and London: Indiana University Press, 1978.
6. Rose, Danis, and John O'Hanlon. *Understanding Finnegans Wake: A Guide to the Narrative of James Joyce's Masterpiece*. New York: Garland Publishing, 1982.
7. Slepion, Raphael. *Glosses of Finnegans Wake in The Finnegans Wake Extensible Elucidation Treasury (FWEET)*, Website.
8. Slepion, Raphael, ed. *Fleet Search Engine in The Finnegans Wake Extensible Elucidation Treasury (FWEET)*, Website.
9. 宮田恭子訳、『抄訳、フィネガンズ・ウェイク』集英社、2004年
10. 柳瀬尚紀訳、『フィネガンズ・ウェイク』I、II、III、IV、河出書房新社、1991年

## ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』

### 第1部第1章の概要

(3.1 ~29.36)

大島 由紀夫

(\*東京海洋大学名誉教授)

**要旨：** ジェイムズ・ジョイス著『フィネガンズ・ウェイク』の第1部第1章3ページ1行目から29ページの36行目までを訳出した。逐語的に訳した箇所もあるが、内容をくみとりながらその主意を表した箇所もあり、「概要」といった題名にした。訳出した本文は小説全体の導入箇所であり、そこには主要テーマとなる諸モチーフが暗示されている。社会や家族における闘争、主人公 HCE と伝説上の人物ティム・フィネガンとの並行関係性、HCE とその家族の人物像、HCE が経験するある事件、などである。

**キーワード：** 『フィネガンズ・ウェイク』、第1部第1章、概要